

『苔の衣』の構想

——『狭衣物語』との関連を中心に——

大倉 比呂志

はじめに

『苔の衣』における主人公は、前半は苔衣中納言（後に大納言、大将となるが、出家。父は関白、母は故中務卿女で前斎宮。姉は三条帝の藤壺中宮、以下、苔衣大将と称する）と後半は三条帝の二宮である兵部卿宮（後に死去。母は藤壺中宮）の二人と考えて異論はなからうが、その二人の造型の基底には『狭衣物語』がちりばめられていると論じられてもいる。^{注②}

一

まず苔衣大将の造型のありかたから見えていくことにする。関白の息子苔衣大将は内大臣（東院上の父内大臣とは別人）と西院上との間に生まれた西院姫君を垣間見て以降、恋慕することになるが、その西院姫君は三条帝より入内を催促され、父内大臣も娘の入内を決意する。それを聞いた苔衣大将は懊悩し、病臥したために、関白夫妻はその原因を知り、関白が内大臣に事情を話したところ、内大臣は娘の入内を断念し、苔衣大将が西院姫君と結婚することとなる。その結果、三条帝は不快感を催し、冷泉院女の弘徽殿姫宮の苔衣大将への降嫁を推進したために、それが原因となって西院

姫君は死去する。その後、苔衣大将に弘徽殿姫宮の降嫁が強要されたので、苔衣大将は表面上承諾のふりをした後、出家する。その経緯を考えていくと、そこに西院姫君をいわば横取りされた三条帝の苔衣大将に対して弘徽殿姫宮の降嫁を強要しようとする〈報復〉が内在するわけだが、そのために懊悩して死去した西院姫君の〈報復〉として苔衣大将が弘徽殿姫宮との結婚を承諾すると見せかけて、出家したという行動には、西院姫君を死去させられたという〈報復〉が想定されているのであって、三条帝と苔衣大将との〈報復合戦〉が語られているとみなすべきだろう。^{注③}

その西院姫君は苔衣大将の視線を通して、次のように語られている。

①（懐妊シテイル）女御（東宮女御）は日頃悩み給へる氣にや、すこし面瘦せ給へるに、白き御衣・葡萄染めの細長なよらかに着なし給ひて、几帳すこし押しやりて添ひ臥し給へる御様、またなくらうたげに愛敬づき子めかしく見え給ふに、御髪の毛のいとこちたくて御衣の裾に足りたらぬほどに糸を繕りたるやうに隙なくかかりて、御髪差しなどはなほ誰にもおとり給はじと見奉り給ふ。そぞろにあたりもかかやくやうなることや、なほありし灯影の姫君（西院姫君）は（東宮女御〈苔衣大将ノ姉〉ヨリモ）優るらんと思す御心ぞ憎き。この女

御をこそたぐひなきことにのしるに、なほたぐひありがたかりし（西院姫君ノ）面影（ヲ苔衣大将ハ）忘れ給はずかし。（春・三九）

②ありつる（西院姫君ノ）面影思ひ出でられて、（苔衣大将ハ）いつしか恋しく思さるるぞうちつけなるや。（春・五九）

③（苔衣大将ガ台盤所ニ並ンテ坐ッテイル女房タチヲ）見渡し給へば、いづれとなく並み居たる女房の用意・有様ゆゑなからずなだらかなるにも、かの月影（西院姫君）思ひ出でられ給ふ。（夏・七〇）

これらは苔衣大将の視線からとらえられた西院姫君のすべてではないが、傍線部の①「灯影」「面影」②「面影」③「月影」に注目してみると、特に「灯影」と「月影」とは「燈火に照らされた姿や形」、「月の光に映し出された物の姿」（以上、補訂版岩波古語辞典）の意味で、美的形容の表象であると考えられる。^{注④}ちなみに、苔衣大将の視線からとらえられた西院姫君は「灯影」（二例中一例）、「月影」（十二例中八例。ただし、「月の光」の意味の「月影」二例は除く）と語られているように、これらの語句によっていかに苔衣大将が西院姫君の美しさに魅了されていたのが引用文①の傍線部によって理解できよう。

さて、西院姫君の入内を知って懊悩する苔衣大将は、

④四月ばかりに（西院姫君ノ入内ガ）定まりぬるを、中納言（苔衣大将）思ひしことぞかしと思し返せど、ただ胸痛くのみなりまさり給ひつつ、はかなき心の中をかくとも知られでもの思ふ人やはある、いかなる前の世の契りにてかう人知れず心を砕きつつ、室の八島の煙だに燃え出でざらん。つひに長らふまじき身にこそなど思し続けるに心地なやましく思さるれば、つくづくとのみ臥し暮らしてさし出で給はぬを、……（夏・八四―八五）

と語られている。傍線部「室の八島の煙」は『狭衣物語』巻一冒頭部において、

⑤（山吹ノ）くちなしにしも咲きそめけん契りぞ口惜しき。心の中、いかが苦しからむ」と（狭衣ガ）のたまへば、中納言の君（注一源氏宮付きの女房）、「さるは言の葉も繁く侍るものを」と言ふ。

いかにせん言はぬ色なる花なれば心の中を知る人はなし

と（狭衣ハ源氏宮ノコトヲ）思ひ続けられたまへど、げにぞ知る人なかりける。「立つ苧環の」とうち嘆かれて、母屋の柱に寄り居たまへる（狭衣ノ）御容貌、この世には例あらかし、と（女房タチニトッテ）見えたまへるに、よしなしごとに、さしもめでたき御身を、室の八島の煙ならではと、（狭衣ガ）立ち居思し焦がるるさまぞ、いと心苦しきや。

とある傍線部に基づいている。ここは狭衣のいとこに当たる源氏宮の母親の死去により、狭衣の母が引き取って一緒に暮らしているわけだが、その源氏宮への狭衣の恋慕が語られている個所である。この「室の八島の煙」と同じような語句は『苔の衣』では他に二例あり（冬・二二一、二二六。いずれも兵部卿宮のいとこに当たる苔衣姫君に対する恋慕が語られている）、『狭衣物語』では他に四例あるものの、それらはすべて「狭衣の源氏の宮思慕を象ることば」^{注⑤}であるのに対し、『苔の衣』においては苔衣大将と兵部卿宮とが各々いとこに当たる姫君を恋慕する過程の中で用いられている。それは狭衣の源氏宮に対する恋慕をいわば二分する形で用いられており、さらに、「室の八島」は『詞花集』（恋上・一八八番）に「題不知 藤原実方朝臣」として入集されている「いかでかは思ひありともしらすべき室の八島のけぶりならでは」の歌に基づいていよう。

また、苔衣大将は西院姫君の入内決定以降病臥していたが、その入内が中止となって、全快し、参内したところ、殿上の管弦の遊びで三条帝より笛を吹くように所望され、辞退するものの、結局吹かざるをえない状況となって、

⑥更け行くまに（苔衣大将ノ吹ク）笛の音澄み上りて、狭衣の大将の、「光にゆかん天の原」と吹き澄まし給ひけん笛の音も、これ（注―苔衣大将）には及ばじや、まことに月の都の人待たるる心地する。めでたかんなる笛の音を、いとかひある夜の遊びと上も思したる。明け方になりぬれば、誰も誰もなごりは多く思しながら、まかで給ひぬ。（夏・九七―九八）

とあるように、苔衣大将の音色は傍線部のごとく「狭衣の大将」以上であると語られているわけだが、この場面は『狭衣物語』巻一の天稚御子降下の件に、

⑦中将の君（狭衣）、もの心細くなりて、いたう惜しみたまふ笛の音をやや残すことなく、吹き澄まして、

稲妻の光に行かん天の原はるかに渡せ雲のかけ橋

と、音のかぎり吹きたまへるは、げに、月の都の人もいかでか聞き驚かざらん。

とある箇所をさしている。このように明確に『狭衣物語』に依拠していることが語られているわけだが、前述したように、後半の兵部卿宮の苔衣姫君に対する恋慕の記事もまた明らかに『狭衣物語』を下敷きにしており、最初から作者の脳裏には狭衣の源氏宮への恋慕を二分しようとする構想が練られていたのではないかと考えられる。それは『狭衣物語』に対する

〈変奏〉といってしまうえば簡単ではあるが、ではどのような構想のもとで『苔の衣』は語られようとしたのだろうか。以下、その点に關していささか述べていくことにする。

二

内大臣（後に右大臣）の妻西院上が重態に陥ったので、見舞いに訪れた関白北の方である姉の前斎宮に自分の死後における西院姫君の世話を依頼していたが、死去後の西院姫君の動向は次のように語られている。

⑧東の院（東院上）には、その後姫君（西院姫君）の御事を心に懸けてのたまへば、（夫ノ内大臣ハ）いとめやすしと思す。斎宮（注―西院上の姉前斎宮）なども迎へきこえまほしくのたまへど、日頃の御有様こそありがたくものし給へど、（西院姫君ガ前斎宮ノ養女トナレバ）人々の見なしも同じ心にてもてなすべきにもあらず。まことに我亡からん後にぞさやうにも譲り奉らめなど（内大臣ハ）思しける。

東の院にはつねにさやうにのたまへば、頼もしき人などもなきに、近きほどと言ひながら（西院姫君ト）離れおはするにおぼつかなくてこなた（東院上へ）（西院姫君ヲ）移ろはせきこえ給ふにも、（西院上ハ）さばかりうしろめたく思したりしをと、候ふ人々も大臣（内大臣）もあはれにもよほさる。上（東院上）は、姫君（西院姫君）の有様目もあやにあさましきまでおぼえて、殿（内大臣）の異事なう（西院姫君ヲ）思したるも理に見給ふ。（西院姫君ヲ）迎へ取り給うて後はおひがひしくつれづれもこよなく紛れ給ふばかりもてなし給ふを、候ふ人々はいつまでとなま心づきなく思ふ。（春・五二―五三）

これによれば、西院上は自分の死後における西院姫君の世話を、姉である

前齋宮に依頼していたにもかかわらず、傍線部のごとく、西院上の「うしろめたく思したりし」東院上がその世話をすることになったわけだが、東院上と西院姫君とが継母継子の関係となつて、いわば〈継子いじめ〉の不安が生じる可能性があり、西院上も死の直前にそのことを心配していたのである。東院上の性悪さは次の例によつても理解できよう。東院上は苔衣大将と結婚直前の西院姫君を弟の源中納言に拉致させようとしたものの、西院姫君と一緒にいた養女の帥宮北の方（注―東院上の姪）を誤つて盗み出してしまつたわけだが、東院上も意図的に賀茂神社に参籠することで留守にして、東院上自身は直接手をくださないといふ〈いじめ〉を仕組んだのである。だが、西院姫君の父親内大臣は東院上が計画したものの、誤つて東院上の養女帥宮北の方が盗み出されたと察知したにもかかわらず、それに対する東院上への〈報復〉は一切語られてはいないのである。それとは対照的に手引きに失敗した帥宮北の方の乳母子である小太夫を東院上は叱責して、追放したために、小太夫は事件の経緯を西院姫君の侍女小侍従に話したところ、西院姫君側は東院上を一層嫌悪するという間接的な〈報復〉をし、さらに、苔衣大将夫妻を父邸に移居させたという点からも、東院上に対する微弱な〈報復〉はなされたものの、東院上に対する内大臣の直接的な〈報復〉は語られてはいないのである。それは東院上の父親が死の直前に内大臣に対して、東院上の世話を依頼する遺言をしたので、内大臣が遠慮したとも考えられるが、たとえそのようであつたとしても、結果的には東院上に対して〈非報復〉であつたと理解されよう。もちろん、東院上はこのような事件を引き起こしたために、世間から〈人笑はれ〉（夏・一一三）となつたのであり、それが間接的な〈報復〉を意味するにしても、『落窪物語』のように落窪姫君の夫である道頼や侍女あこきによる継母側への直

接的な〈報復〉は語られておらず、いわば〈非報復〉が中世王朝物語における〈継子譚〉の傾向であつたのだ。その代替として、三条帝への西院姫君の入内予定の破棄と苔衣大将との結婚、その〈報復〉として三条帝が父冷泉院女の弘徽殿姫宮の降嫁を苔衣大将に押し付けたことによる西院姫君の死、苔衣大将が弘徽殿姫宮の降嫁を承諾したように見せかけながらも、出家するといふ〈報復〉、いわば三条帝と苔衣大将との間で繰り広げられた〈報復合戦〉が語られることによつて、活劇性がもたらされたのではないのか。

また、秋の巻の冒頭部で西院姫君が苔衣姫君を出産した記事に続けて、東宮の元服と二宮である兵部卿宮の袴着のことが語られているのは、後の冬の巻で東宮と結婚した苔衣姫君が兵部卿宮との間で展開される密通の伏線とみなすべきだろう。そのうえ、西院姫君が死を意識して、自分の死後における苔衣姫君の世話を西院姫君が母親の死去後に引き取られた性悪な東院上とは異なり、苔衣大将の姉である藤壺中宮に依頼している件は、中宮が苔衣姫君を引き取ることを意味しているのであつて、それは中宮所生の男宮たちとの接近を導く装置として考えられていたと推測される。

ところで、苔衣大将が殿上における管弦の遊びからの帰途、苔衣大将への降嫁が取り沙汰されている弘徽殿姫宮を垣間見る件は、

⑨月傾くほどになりて、大将（苔衣大将）出で給ふとて、弘徽殿の方、通り給ふに、箏の琴の音かすかに聞こえたるを、やすらひつ過ぎやり給はねば、いとなまめかしう懐かしげなるを、誰ばかりならんとさすがにおぼつかなくて、細殿の戸口の開きたるよりやをら入り給へど、「いかに」と怪しむる人もなければ、嬉しくてたて渡されたる几帳に紛れつつ入り給へば、琴の音近

く聞こえて、灯の光など見ゆるを、わりなき庇より覗き給へば、御前に四五人ばかり候ひて、短き灯台に灯ともして絵など見るべし。……「よきと言はるる辺りもなべてはかやうにこそ」とうち呻かれて、立ち給ふぞ、「我ながらいみじき聖心なる」と、すこし一人笑みせられ給ふ。あからさまにもこの辺り（注―弘徽殿姫宮の辺り）立ちやすらひては人に見えじと思せば、急ぎ出で給ひぬ。注⑥（秋・一四七―一四八）

と語られている。そこで場面状況が類似していると考えられる『源氏物語』を取り上げることにする。光源氏が宴の後に朧月夜と初めて逢う件は、

⑩夜いたう更けてなむ事はてける。上達部おのおのあかれ、后、春宮かへらせたまひぬれば、のどやかにぬるに、月いと明うさし出でてをかしきを、源氏の君酔ひ心地に、見すぐしがたくおぼえたまひければ、……藤壺わたりをわりなう忍びてうかがひ歩けど、語らふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口開きたり。

（花宴巻）

と語られているように、朧月夜と情交を結ぶわけだが、宴の後という状況と弘徽殿の細殿という場所の設定までもが引用文⑩と類似している。桐壺院の崩御に伴ない、朱雀帝の母弘徽殿女御や祖父右大臣の勢力が強まったにもかかわらず、光源氏の度重なる朧月夜との密会が続く、帰途の際に、「承香殿の御兄弟の藤少将、藤壺より出でて月のすこし隈ある立部の下に立てりけるを知らで」通り過ぎる光源氏が語られ、藤少将が右大臣側に組している人物であるだけに、「過ぎたまひけんこそいとほしけれ。（光源氏ヲ）もどききこゆるやうもありなんかし」（以上、賢木巻）と将来における

光源氏のことを同情的な草子地で語られているごとく、このことが後に生ずる光源氏の須磨・明石流離事件の引き金となっている。とすれば、光源氏と朧月夜との出逢いにおける装置が『苔の衣』での苔衣大将の弘徽殿姫宮に対する垣間見場面に影響を与えているといえよう。

ちなみに、『狭衣物語』で飛鳥井女君の遺児である飛鳥井姫君が故一条院の姫宮の一品宮のもとに引き取られていることを狭衣が聞いて、様子を探るために一条院に忍び込んだのを権大納言に目撃されて、一品宮との仲が噂となって結婚せざるをえないような状況に追い込まれる。これもまた他者によって目撃されて、狭衣にとっては一品宮との結婚という負的狀況を背負うことになる。このように女を垣間見ることによって、男主人公が負的狀況を背負うという点では、『源氏物語』と『狭衣物語』とは次元を異にするものの、共通性を有しているのである。

今まで述べてきたように、『苔の衣』は『源氏物語』花宴巻の装置を利用して、苔衣大将が弘徽殿姫宮を垣間見るといふように設定されているわけだが、それは『源氏物語』や『狭衣物語』とは異なり、他者によって垣間見が目撃されることがない点から考えると、弘徽殿の細殿における宴の後の出来事という設定がなされた『源氏物語』への〈同化〉と〈異化〉とが考えられるのと同時に、『狭衣物語』への〈異化〉という様相を呈しているのであり、『苔の衣』は『源氏物語』に寄りかかりながらも、『源氏物語』と『狭衣物語』とをズラシて語られているのである。

三

苔衣姫君が伯母藤壺中宮のもとに引き取られ、兵部卿宮と同じ屋敷で生育していく中で、兵部卿宮は苔衣姫君を恋慕するものの、「さばかりうち

とけつつ、かかる心の隔てあらんと（苔衣姫君ガ）つゆ思したらぬに、なかなかかくと聞こえ出でて、思はずに心憂しと思ひ疎まれんこそあやなかるべけれ」（冬・二〇八―二〇九）と兵部卿宮が思っているのです、態度には表わさずにいたところ、母親の藤壺中宮はそれに気付かず、その苔衣姫君を東宮と結婚させたために、兵部卿宮は苔衣姫君と密通するに至る。兵部卿宮と苔衣姫君といういとこ同士が同じ屋敷内で成長していくということ、『狭衣物語』における狭衣と源氏宮との関係の影響を受けているわけだが、兵部卿宮の密通は「恋も密通もともども遂げられぬままの源氏の宮と狭衣の関係の裏返し」^{注②}であったと考えられ、『狭衣物語』に対する〈反措定〉が提示されたのだとみなせよう。さらに、兵部卿宮は苔衣姫君との逢瀬がかなえられないために、「あやしくらうたげに子めかしき目見のわたりなどつれなき人（注―苔衣姫君）に露ばかり思ひよそへら」（冬・二二四）れる住吉姫君（母親は東院上の養女の帥宮北の方で、双子の姉君）と情交に至るわけだが、それは狭衣と飛鳥井女君との関係に基づいていることが既に指摘されているように、^{注②}兵部卿宮の関わったこれら二人の女たちに関しては『狭衣物語』が基層にちりばめられているよう。

ところで前述したごとく、苔衣大將は西院姫君に恋慕するが、西院姫君が三条帝への入内予定者であったために、苔衣大將は病臥するものの、西院姫君の入内が取り止めになった結果、苔衣大將は西院姫君と結婚する。これは一種の〈略奪〉とも考えられ、苔衣大將に弘徽殿姫宮が降嫁されそうになったために、西院姫君は懊悩した挙句、死去する。それが引き金となって苔衣大將は出家するわけだが、これは現世における〈死〉を意味しよう。

一方、兵部卿宮は幼なじみの苔衣姫君（後に結婚した東宮の即位に伴ない、

中宮）に恋慕するが、姫君が兄の東宮と結婚したために、姫君との密通を引き起こし、若宮（後に東宮）が誕生する。表面上ではこの若宮が東宮の子である点を考えると、光源氏と藤壺との密通の結果、後の冷泉帝（表向きは桐壺帝の子）が誕生するのと同じ話筋である。その兵部卿宮の密通は一種の〈性〉の〈略奪〉なのであって、そのような意味からすれば、苔衣大將と兵部卿宮とは類似性を有する人物であると考えられる。その後、兵部卿宮は北の方の母親と姉妹である対の君が母代として世話をしている住吉姫君と情交を結ぶわけだが、住吉姫君は北の方（式部卿宮女）とその母中君に対する良心の苛責のために懊悩し、自ら剃髪して、尼姿になった後、住吉で出家した昔の少納言の乳母の姉と住吉姫君の女房である小大夫が文通していたのを想起して、住吉に失踪し、そこで男君を出産し、死去するのである。兵部卿宮も苔衣姫君のことが忘れられず、苦悩した結果、死去する。苔衣姫君も重態に陥るが、出家した父苔衣大將が夢告により、姫君のもとに赴き、^{注⑦}加持をしたために、姫君は治癒する。このことは既に指摘されているように、『浅茅が露』の影響を受けていると考えておいて差し支えなからう。ここで注意しておかなければならないことは、兵部卿宮と住吉姫君の二人は〈死〉の運命を歩み、苔衣姫君も〈死〉の境界線に立つものの、かろうじて父親に助けられたということだ。以上のように、苔衣大將の血に繋がる兵部卿宮と苔衣姫君とが〈死〉ないしは〈死〉の境界線に至るということだ。このような状況の中で、出家した父苔衣大將とその父の加持によって娘の苔衣姫君とが〈生〉の領域に足をどめたという点で、父親と娘との強固な紐帯に留意すべきであり、それは朱雀院と女三宮という父娘の関係を髣髴とさせる。^{注⑧}

おわりに

この『苔の衣』では内大臣をめぐる東院上と西院上、苔衣大将と西院姫君、兵部卿宮と苔衣姫君・住吉姫君という女系三世代の恋愛模様が語られているわけだが、後の二世代が主軸となっている。

ところで、父親が死に瀕している娘を助命した個所で擱筆されている点からすれば、〈親子愛〉もしくは〈肉親愛〉の文学として把握することは可能だろう。それは次元が異なるものの、随所で中納言の母親を思う情が語られている『八重葎』とも通底していると考えられる。ちなみに『風葉集』において、『苔の衣』の歌が二首採歌されているのに対して、『八重葎』の歌は採歌されていない点から、〈親子愛〉ないしは〈肉親愛〉が語られている『苔の衣』が『八重葎』に影響を及ぼしているのかもしれない。とすれば、『浅茅が露』↓『苔の衣』↓『八重葎』という〈親子愛〉もしくは〈肉親愛〉の文学の系譜が想定できるのではなからうか。

『苔の衣』の本文は中世王朝物語全集により、春夏秋冬は巻、漢数字は該当ページを示す。『狭衣物語』『源氏物語』は新編日本古典文学全集、『詞花集』は新日本古典文学大系による。なお、私に表記の一部を改めた箇所がある。

* * *

注① 詳しくは大倉『物語文学集攷—平安後期から中世へ—』「第二部 七 苔の衣(1)苔衣の大将と兵部卿宮を中心に」(新典社 二〇一三・2。初出、二〇〇一・2)を参照されたい。

② 足立蘭子「転倒した『狭衣物語』 鎌倉物語『苔の衣』と『始源』なるも

のへの指向」(吉井美弥子編『へみやび』異説)に所収 森話社 一九九七・5)。
大倉注①前掲書「第二部 七 苔の衣(2)『源氏物語』の新たな〈再生産〉を指して」(初出、二〇一〇・1)を参照されたい。

③ なお〈報復〉という点に注目すると、『落窪物語』(巻二)で継母から種々の〈いじめ〉にあった落窪姫君が道頼少将に救出された後、道頼少将と以前から結婚話のあった継母の実子である四君に関して、道頼少将は継母側への〈報復〉のために、その結婚を承諾したように見せかけて、代わりに替え玉(面白の駒)と結婚させている点を考えると、前述したような『苔の衣』における苔衣大将の〈報復〉とは次元を異にするものの、〈報復〉という面で一脈通じるものがあるのではないのか。すなわち、『苔の衣』の欺瞞を秘めた結婚承諾の件は、『落窪物語』における道頼少将の隠された企図を達成するための結婚承諾の部分の影響を蒙っていると考えられる。
④ 『夜の寢覚』において、寢覚上は主人公並びに帝の視線から「月影」「灯(火)影」と語られている。詳しくは、大倉注①前掲書「第一部 一夜の寢覚(1)女君の造型と物語の方法」(初出、一九九七・3)を参照されたい。
なお『源氏物語』総角巻に、薫に闖入された大君は「何心もなくやつれたまへる墨染の灯影を、いとほしたなくわびしと思ひまどひたまへり」とあり、傍線部のごとく、やつれた尼姿の大君が語られている用例もあるが、基本的には「月影」「灯影」は美的形容の比喩と考えておいて誤りはなからう。

⑤ 後藤康文「室の八島」の背景」(『狭衣物語論考』【本文・和歌・物語史】に所収 笠間書院 二〇一一年・11。初出、一九九七・8)。

⑥ この弘徽殿姫宮への垣間見のことは、後になって「思はずに開きたりし弘徽殿の細殿の三の口のしるべの夜、思ひやりなく心高きもてなし(注「皇女を妻にしたいという気持ち」)ならましかばいかに人(弘徽殿姫宮)のためにもむげに心苦しからまし。よくこそ心は収めけれど我ながら(苔衣大将へ)心奢りして思さる」(秋・一七三)と誰にも見とがめられず、自制心が働い

て闖入するようなことはなかったと苔衣大将は自分の過去の行動を賞讃しており、それが苔衣大将の心中思惟として自讃的に語られている。

- ⑦ 安達敬子「源氏物語という拘束―『苔の衣』・『木幡の時雨』の場合」(『源氏世界の文学』に所収 清文堂 二〇〇五・3。初出、二〇〇〇・6)。ただし『浅茅が露』の場合には、父親である書写山の聖が北山の聖に夢告し、姫君を蘇生させたと語られている点に注目すると、その差異に注意を払っておく必要がある。

- ⑧ 安達敬子は注⑦前掲論文において、例えば秋の巻の大半が若菜上巻から幻巻までの換骨奪胎であると指摘している。

- ⑨ 神野藤昭夫「『苔の衣』の方法と特質」(『散逸した物語世界と物語史』に所収 若草書房 一九九八・2。初出、一九八七・5)、足立繭子「『苔の衣』論―母系物語としての意味―」(『年刊 日本の文学』第3集に所収 有精堂 一九九四・12)。

- ⑩ 豊島秀範は「『苔の衣』主題論」(『物語史研究』に所収 おうふう 一九九四・5。初出、一九八九・3)において、主題を「『親子の恩愛』」と規定する。

- ⑪ 妹尾好信「『八重葎』の再評価」(辛島正雄・妹尾好信編『中世王朝物語の新研究』に所収 新典社 二〇〇七・10)。

補記

拙著『物語文学集攷―平安後期から中世へ―』(新典社 二〇一三・2)の「第二部 七 苔の衣(2) 『源氏物語』の新たな〈再生産〉を指して」の注(8)「秋の巻の大半が若菜上巻から幻巻までの換骨奪胎であるとし」ニ云々(三二六ページ)の個所における「若菜上巻」を「若菜上巻」と訂正しておきたい。

(おおくら ひろし 日本語日本文学科)